

# 道頓堀とベナレス

——葬墓制と他界観の一局面——

山折哲雄

- 一 近松の「曾根崎心中」
- 二 心中者の遺骸
- 三 道頓堀墓所
- 四 ベナレスの死体焼却場

- 五 死の纏れ
- 六 観音廻りと道行
- 七 終局のコース

## 論文要旨

近松門左衛門の「曾根崎心中」は、元禄十六年（一七〇三）の四月七日に、大阪梅田の曾根崎天神で実際におこった事件をモデルにしていて。ところがそれ以後、心中事件が多発するようになり、二十年後の享保八年（一七二三）になつて心中取締令がだされた。そのうえ心中者の死骸は心中現場に近い墓所に取り捨てるべきことが申しわたされていた。なかでも道頓堀墓所には多くの心中者の遺骸がかづぎこまれ、その方面での筆頭格であった。そのためこの地域には大勢の乞食女郎非人たちが入りこみ、そこで餓死したり行き倒れたりする者があとを絶たなかつた。

この近世の道頓堀墓所をめぐる死体処理・死者儀礼の景観は、ある点でインド・ベナレスにおけるそれを想わせる。死者の処理をめぐって都市がどのような変貌を示すのかという点でも、その両者のあいだには不思議な照応がみられるのである。なぜなら肉体の焼尽と魂の昇天という転換の位相が、そこでは墓

地を仲立ちとする半ば様式化した空間構成を通してあらわされているからである。そしてその空間構成の輪郭を明らかにするために、小論では近松の「曾根崎心中」の冒頭に掲げられている「観音廻り」の場面と、その終結部分に登場する「道行」の場面に分析を加えている。

この近松の「観音廻り」と「道行」の場面が、二種の巡礼のパターンを象徴しているということに注目しよう。第一のパターンが、いわゆる靈地靈場廻りを中心とする巡礼である。この場合は「観音廻り」がそれにあたるだろう。これにたいして第二のパターンが、永遠の再生（昇天）を願う死出の旅という最後の巡礼行である。ここではそれが「道行」の場面にあたる。そしてこの二種の巡礼のパターンがそのままベナレスにおける死者儀礼のなかにもみられるに私は着目したのである。小論はその両者を結び合せる比較研究の試みである。